

大学生の飲酒調査

第一報 中日本自動車短期大学生の実態について

水野敏明・大塚三雄

1. はじめに

最近の大学生は、付き合い、コンパ、打ち上げなど、何か事があるごとに酒を飲むようである。彼らの中には未成年者もいるが、かなりの量のアルコール飲料を飲む者もいるようであり、社会の目も大学生であるとして寛大であるように思われる。

大学生の飲酒問題は、イッキ飲みによる急性アルコール中毒や公衆酩酊等がしばしばマスメディアに報道をされている。

本研究は男子短期大学で、その学生の大部分が未成年者であり、法的には飲酒できない環境下にある学生の飲酒経験や飲酒状況及びアルコールに関する知識を調査することにより、飲酒によって起される問題行動及びその発生の予防と、さらに健康管理、健康教育のための資料を得る目的で行い、若干の興味ある結果を得たのでここに報告する。

2. 調査対象及び調査方法

調査対象は中日本自動車短期大学1年生614人と2年生584人の男子学生計1,198名である。

調査は昭和61年1月から2月にかけて行ない、1年生は保健体育講義時間に筆者が学生に調査用紙を配布し、その場で記入させ回収し、2年生は学生部研修課に依頼し、自動車整備実習時間に1年生と同様に行った。回収率はほぼ100%であった。

調査用紙は岐阜大学医学部衛生学教室¹⁾及び谷ら²⁾の調査項目を参考にして作成した質問紙を用いた。集計は岐阜大学医学部衛生学教室のコンピューター（光束電子工業KK, 日本ミニコンNOVA）により行った。

3. 結果と考察

1) 飲酒状況

初回飲酒の経験時期を見ると高校生時代が60.4%と高く、次いで中学生時代の20.6%であり、大学生になって飲酒を経験した者が11.3%である。従って学生の約85%は18才未満に飲酒

表1 飲酒の状況

①初回飲酒の時期	(%)
1. 大学生頃	11.3
2. 高校生頃	60.4
3. 中学生頃	20.6
4. 小学生頃	4.3
5. 未だ飲んだことがない	1.8
6. 無答	1.5
②きっかけ	
1. 付き合い	47.2
2. コンパ	11.6
3. 好奇心より	20.2
4. 親のすすめ	14.0
5. その他	6.9

③ 飲酒頻度 (%)	
1. 毎 日	1.5
2. 週 4 回以上	1.6
3. 週 2-3 回	7.6
4. 週 1 回	14.8
5. 殆んど飲まない	38.3
6. 不規則だが飲む時は片寄る	32.9
7. 無 答	3.4
④ この一週間で何日飲酒したか	
1. 毎 日	1.4
2. 6 日~4 日	2.7
3. 3 日~2 日	14.1
4. 1 日	24.1
5. 全 く な し	56.1
6. 無 答	1.6
⑤ 酒の種類	
1. ビ ー ル	50.9
2. ウイスキー	24.7
3. 清 酒	10.2
4. 焼 酎	7.4
5. ワ イ ン	1.7
6. ブランデー	1.6
7. そ の 他	3.6
⑥ 飲酒場所	
1. 自 宅	17.1
2. 下 宿	19.1
3. 友人・知人宅	23.6
4. 一杯飲み屋 (居酒屋含む)	22.6
5. スナック	10.4
6. バー・キャバレー	1.0
7. そ の 他	6.4
⑦ 1ヶ月当りの飲酒費用	
1. 500円ぐらい	32.4
2. 1,000円 "	20.5
3. 3,000円 "	17.3
4. 5,000円 "	7.9
5. 10,000円 "	4.2
6. それ以上	1.7
7. 無 答	15.9
⑧ 飲酒の理由	
1. 酒の味が好きだから	7.8
2. 食欲増進のため	0.6
3. 疲れをとるため	3.0
4. 気分転換のため	22.1
5. 酔うため	4.9
6. 付き合いに必要だから	32.3
7. 大人だから飲むのが当然	0.6
8. 特に理由はないが飲みたいから飲む	19.2
9. そ の 他	9.5
⑨ 飲酒の現状	
1. 現在よく飲む	13.0
2. 付き合い程度	73.3
3. 全く飲まない	13.4
4. 無 答	0.3
⑩ クラブ活動・サークル活動での飲酒の機会	
1. あ る	24.0
2. な い	65.8
3. 無 答	10.2

の経験があり、これは谷らの報告²⁾とほぼ同じ結果であった。

飲酒のきっかけは、「付き合い」が47.2%、「好奇心」が20.2%、「親のすすめ」が14%、「コンパ」が11.6%であった。「親のすすめ」が14%あるのは酒に対する寛大な社会風土が背景にあることがうかがわれる。

飲酒頻度は「殆んど飲まない」が38.3%、「不規則だが飲む時は片寄る」が32.9%、「定期的に飲んでいる」と思われる者が25.5%であった。定期的に飲んでいる者を、青山ら³⁾の分類による常習飲酒者(週4回以上の飲酒者)と習慣飲酒者(週1回以上~3回以内の飲酒者)に当てはめて比較すると、本学の場合はかなり少ない割合である。しかしながら「調査時より一週間前の期間の飲酒の有無」は、「飲んだ者」が42.3%からすると習慣飲酒者はもう少し高い割合ではないかと思われる。

酒の種類では、「ビール」が50.9%で最も多く、「ウイスキー」が24.7%、「清酒」が10.2%、「焼酎」が7.4%であった。他の報告^{2,3)}と比べるとかなり異なっていた。谷らの報告²⁾では、「ビール37%」、「洋酒35%」、「清酒28%」であり、平山らの報告では「清酒39%」、「洋酒31%」、「ビール30%」であり、豊田らの報告¹²⁾では「洋酒」、「ビール」、「清酒」、ごくまれであるが「焼酎」の順であった。従って大学によってかなりの違いが見られることがわかる。本調査とその他の調査では約10年間の年代による差もあり、現在の日本人の飲酒状況もその頃と比べるとかなり異なっていることや、都道府県によっても酒類の消費

量の違いが見られることからして、大学による差と地域による差および調査時期(年代)による違いがあるものと思われる。

飲酒の場所は、「友人・知人宅」が最も多く23.6%で、「一杯飲み屋(居酒屋含む)」が22.6%、

「下宿」が19.1%、「自宅」が17.1%、「スナック」が10.4%の順であった。友人・知人宅や下宿・自宅で飲酒する場合を合計すると約60%であり、これらはあまり金のかからない学生らしい飲み方をしているものと思われる。

1ヶ月当りの飲量の費用は1,000円以下が52.9%であり、飲酒の場所との関連がうかがわれる。

飲酒の理由は、「付き合いに必要だから」が32.3%で、「気分転換のため」が22.1%、「特に理由はないが飲みたいから飲む」が19.2%であった。付き合いや気分転換で飲酒するというのはいずれも酒の直接効果を求めているものではなく、強いて言えば人間関係や精神衛生面に酒の効用を求めている傾向が大きいものと思われる。

飲酒の現状は、「よく飲む」が13%であり、このことは飲酒の頻度で見たように、常習飲酒者か習慣飲酒者と思われる。

クラブ活動、或いはサークル活動での飲酒の機会は、「ある」が24%であった。本学の学生がクラブ活動及びサークル活動に参加している状況を見ると(1986年4月、2年生606人)、体育系クラブ5.6%、同好会4.5%、学術系クラブ3.3%、その他2.6%の計16%の学生が何等かの活動に参加し、84%の学生は参加していない現状が見られる。従って、低い割合となったものと思われる。

2) 飲酒に関する意識

「酒を飲むことが好きか、嫌いか」について、好きな学生が、嫌いな学生よりわずかであるが多い。

「学生として酒を多く飲む方か」どうかについては、「少ない方」と答えた者が55.3%で、「普通」が28.2%、「わからない」が10.2%、「多く飲む方」と答えた者が3.7%であった。従って、他に比較して自分の飲酒量は少ないと思っていることがうかがわれる。

飲酒時の精神状態の変化を見ると、「陽気で朗らかになる」が40.5%で、「変わらない」が25.8%、「眠くなる」が18.1%であった。他の調査と比べると「陽気で朗らかになる」が本学の場合

表2 飲酒に関する意識

①酒を飲むことが好きか	(%)
1. 好 き	29.6
2. どちらとも言えない	47.8
3. 好きではない	22.3
4. 無 答	0.3
②学生として酒を飲む方と思うか	
1. 多く飲む方と思う	3.7
2. 普通	28.2
3. 少ない方と思う	55.3
4. わからない	10.2
5. 無 答	2.6
③飲酒後の状態	
1. 陽気で朗らか	40.5
2. 沈 む	1.7
3. 眠 くなる	18.1
4. 気が大きくなる	6.3
5. 乱暴になる	1.8
6. 意識が薄らぐ	1.6
7. 頭が冴える	1.4
8. 変 ら ない	25.8
9. 無 答	2.7
④顔面紅潮	
1. 赤 くなる	43.0
2. 少し赤くなる	21.2
3. 変 ら ない	31.4
4. 青 くなる	2.2
5. 無 答	2.2
⑤酒に対して強い	
1. 強いと思う	7.7
2. 普通	39.8
3. 弱いと思う	42.5
4. わからない	8.5
5. 無 答	1.5
⑥学生生活の上で酒は必要か	
1. 必 要	9.0
2. 時 に 必要	51.2
3. 必要ではない	18.0
4. わからない	19.9
5. 無 答	1.9
⑦人生で酒は有益か	
1. 有 益	13.0
2. 時 に 有益	51.3
3. 思 わ ない	15.3
4. わからない	18.4
5. 無 答	2.0

合は大変低い割合であった。

飲酒と顔面紅潮との関係は、「赤くなる」が43%で、「少し赤くなる」が21.2%、「変わらない」が31.4%、「青くなる」が2.2%であった。顔面紅潮はアルコールの代謝に関係し、アルコールから生じたアセトアルデヒドはアセトアルデヒド脱水素酵素 (ALDH) により代謝されるが、ALDHの成分 (I型・II型) の違いが顔の赤くなる人とならない人との差になる。ALDH I型の方はアセトアルデヒドを速く効率よく代謝するのに対して、II型の方はアセトアルデヒドの濃度が一定のレベルになってはじめて代謝が進む。従ってALDH I型欠損は、飲酒后、血中アセトアルデヒド濃度が容易に高まり顔面紅潮を示す。日本人はALDH I型欠損が多いことが知られているが、この調査に於て64.2%の顔面紅潮を示していることは大半がALDH I型欠損例であることが推定できよう。

「酒に対して強い、弱い」という意識は、弱いと思っている者が42.5%で最も多く、普通と思っている者が39.8%で、強いと思っている者は少ない。

「酒は学生生活で必要か」と「酒は社会生活で有益か」については、いずれも肯定している者が約60%を示していた。これは谷らの調査と同様の傾向を示していた。

3) 飲酒に関する問題行動

学生の飲酒に関する問題行動の調査は「二日酔いで大学を休んだり、遅刻したことがあるか」は、約10%が「あり」で、「飲酒で事故 (交通事故・けが・他人及び家族に迷惑をかけた等) を起した者」が約5%あった。

現在も学生間で流行している通称「イッキ飲み」の経験者が72%もある。これはおどろくべき数であり、また「一緒に飲んでいる友がイッキ飲みで意識不明の様な状態になった経験があるか」については、約14%あると答えている。

付き合いで多量に飲酒する機会は、「月に1~2回」と「年に1~2回」が多く、合せて約64%であった。

飲酒時の喫煙は、「喫煙する者」が65.2%であり、その内で「いつもより喫煙本数が多くなる者」が54.2%であった。

表3 飲酒に関する問題行動

①二日酔いで大学を休んだり、遅刻したことがあるか (%)		(%)
1. な い		88.1
2. たまにある		9.5
3. よくある		1.2
4. 無 答		1.1
②飲酒で事故を起こしたことがあるか		
1. 交通事故を起こした		0.5
2. けがをした		1.1
3. 他人に迷惑をかけた		2.4
4. 家族に "		0.8
5. な い		93.8
6. 無 答		1.4
③イッキ飲み経験の有無		
1. あ る		72.0
2. な い		26.5
3. 無 答		1.5
④一緒に飲んでいる友がイッキ飲みで意識不明の経験		
1. あ る		14.1
2. な い		80.2
3. わからない		4.2
4. 無 答		1.6
⑤酒を飲み身体に異状が起き病院へ行ったことがあるか		
1. あ る		3.0
2. な い		95.4
3. 無 答		1.6
⑥付き合いで多量に飲酒する機会		
1. 毎 日		0.9
2. 週1~2回		5.1
3. 月1~2回		30.2
4. 年1~2回		34.0
5. 殆んどない		25.3
6. そ の 他		4.5
⑦飲酒時の喫煙		
1. 吸 う		65.2
1) 多くなる		54.2
2) いつもと同じ		25.9
3) 少なくなる		7.2
2. 吸わない		31.7
3. 無 答		3.1

このように学生の飲酒に関する行動は、かなり多方面に渡る問題が含まれており、さらに深く調査、分析を試み、少しでも実態の解明ならびに対策のための参考としたいものである。

4) 飲酒に関する一般的知識

女子学生の飲酒に対して男子学生がどのように思っているか調査したところ、よいことと肯定している者が17.4%、否定している者が15.1%、肯定も否定もしない者が約60%であった。この結果は他の調査でもほぼ同じで、10年の年代的差は見られない。

急性アルコール中毒の症状（酩酊）について知らない者が44.2%であり、これはアルコール症を含め、アルコールに関する教育及び指導の必要性が認められる。

5) 考 察

昭和60年の厚生省の発表した“飲酒パターンとその健康への影響に関する調査”で医学的治療を必要とするアルコール依存症（アルコール中毒）患者が少なく見ても全国で220万人と推定されるとし、国内のアルコール消費量は年々増え、昭和58年の飲酒人口は5,600万人と報告⁷⁾している。

今回の調査から見ても、常習飲酒者及び習慣飲酒者が10～20%程度見込まれ、これらの学生はアルコール依存症の予備軍とも思われる。また初回飲酒経験の年代を見ても、中学・高校で約80%が飲酒を経験している。この背景には酒に対する寛大な風土があり、また未成年者飲酒禁止法・酩酊者規制法がありながら実際には全くといっていいほど施行がなされていないこと、野放しの酒類自動販売機の存在があげられ、さらにアルコールに関する教育の低さも一因しているのではないかと思われる。

従って、調査の結果、飲酒学生が多い現状からして、今後はアルコールと健康に対する教育活動の必要性が認められる。

4. ま と め

中日本自動車短期大学1年生と2年生、計1,198名に対して飲酒に関する調査を行った。その結果を要約すると以下のものであった。

表4 飲酒に関する一般的知識

①女子大生の飲酒について		(%)
1. 良いことだと思う		17.4
2. 良くないことだ		7.5
3. やめるべきだ		7.6
4. なんとも言えない		59.2
5. わからない		6.7
6. 無 答		1.6
②急性アルコール中毒の症状について		
1. 知っている		54.0
2. 知らない		44.2
3. 無 答		1.8
③身近でアルコール中毒と思われる人がいますか		
1. い る		12.3
2. い な い		74.2
3. わからない		12.1
4. 無 答		1.5
④現在の健康状態について		
1. 健 康		37.6
2. 普 通		48.5
3. あまり良くない		7.8
4. 悪 い		2.0
5. わからない		2.7
6. 無 答		1.4
⑤両親の飲酒		
1. 父 飲 ま む		74.9
飲 ま ない		17.6
わ かり ない		7.5
2. 母 飲 ま む		37.3
飲 ま ない		50.6
わ かり ない		12.1

① 飲酒の状況について、初回飲酒の経験は、小学生時代4.3%、中学生時代20.6%、高校生時代60.4%、大学生時代11.3%であり、学生の約85%は18才未満に経験していた。現在飲む酒の種類は、ビール50.9%、ウイスキー24.7%、清酒10.2%、焼酎7.4%の順であった。飲酒の場所は友人・知人宅、自宅、下宿が59.8%、一杯飲み屋22.6%、スナック10.4%であった。1ヶ月当りの飲酒費用は、500円～1,000円ぐらいが52.9%、3,000円ぐらいが17.3%、5,000円ぐらいが7.9%、10,000円ぐらいが4.2%の順であった。

② 飲酒に関する意識について、酒を飲むことが好きな者が29.6%、どちらとも言えない者が47.8%、好きではない者が22.3%であった。学生生活の上で酒を必要と思っている者が9%、時に必要と思っている者が51.2%、必要ではないと思っている者が18%であった。同様に人生で酒は有益と思うかについても、ほぼ同じ傾向を示した。

③ 飲酒に関する問題行動について、二日酔いで大学を休んだり、遅刻したことがある者が10.7%であった。飲酒で事故を起した者が4.8%であった。イッキ飲みの経験のある者が72%であった。一緒に飲んでいる友がイッキ飲みで意識不明のような状態になったことがある者14.1%であった。問題行動とは言えないが、飲酒時に喫煙する者が65.2%で、その内で54.2%の者は飲酒時に喫煙本数が増す。

④ 飲酒に関する一般的知識について、急性アルコール中毒の症状を知らない者が44.2%であった。

今回は実態の把握のみに終始したが、今後はさらに他大学の資料と年令別、男女別、通学方法別、クラブ活動別に検討を加えたい。

最後に本研究を進めるに当ってご指導を賜った岐阜大学医学部衛生学教室の大森正英博士と青山政史博士に厚くお礼申し上げますと共に、ご協力をいただいた本学佐藤一夫助教授と脇俊隆助教授に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 大森正英・水野敏明他：山村におけるアルコール摂取情況とその特徴：日本公衆衛生雑誌第32巻，第10号 P596 1985
- 2) 谷直介・堀井高久他：飲酒に関する意識調査第3報大学生：アルコール研究，12—(4)，P213～222，1977
- 3) 谷直介・葉賀弘他：飲酒に関する意識調査第5報教育大生：第16回アルコール医学会総会誌，Ps89～90
- 4) 青山莞爾：大学生の飲酒様態と集団の問題飲酒の指標：アルコール研究 17—(1)，P51～73，1982
- 5) 青山莞爾・森忠繁他：理科系大学の飲酒様態：第16回アルコール医学会総会誌，Ps95～96
- 6) 佐藤一郎・千葉裕典他：新入学生の飲酒に関する研究：第13回アルコール医学会総会誌，P122～123
- 7) 樋口進・河野裕明：わが国における飲酒の実態と今後の予測：医学書院，medicina，No 3 Vol 23，P412～414 1986

水野敏明・大塚三雄：大学生の飲酒調査

- 8) 昭和61年度父兄懇話会資料：中日本自動車短期大学学生部 1986
- 9) 大森正英・水野敏明：くらしの健康学：中央法規 1986
- 10) 原田勝二：酒豪の素質・下戸の素質：Cosmo No.13—5 1983
- 11) 大森正英：アルコールと肝：診断と治療, 73巻 5号 P20~24 1986
- 12) 豊田清修：飲酒みの科学と健康：共立出版 昭和54年
- 13) 秋山啓：大学生の飲酒習慣に関する調査：東京大学医学部保健学科 昭和44年
- 14) 大津一義・柳田美子他：中・高校生の飲酒の実態と問題点及び対策：学校保健研究 Vol 26 No 6 1984
- 15) 青山莞爾・森忠繁他：学生の飲酒様態と父親の飲酒様態：第17回日本アルコール医学会総会誌, Ps111~112
- 16) 佐々木武史・額田繁他：問題飲酒の予防的スクリーニングテスト：アルコール研究 15—(4) P345~355
1980
- 17) 鈴木康夫・鈴木芳江他：高校生のアルコール乱用について：アルコール研究 16—(3) P262~272 1981
- 18) 佐々木武史・山田壽子：大学生の飲酒様態第1報：第16回アルコール医学会総会誌 Ps91~92
- 19) " " " 第2報：第16回 " Ps93~94
- 20) " " " 第3報：第17回 " Ps113~114